

3. 新聞等に掲載された活動

○放射線リスク制御部門 国際保健医療福祉学研究分野

| 氏名・職 | 活動題目 | 掲載紙誌等 | 掲載年月日 | 活動内容の概要と社会との関連 |
|---------|--------------------|-------|---------------|--|
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月1日 | 福島県内では除染しても空間線量率が0.23 マイクロシーベルト/時を下回らない地域があるが、このような場所で1年間生活したとしても健康影響は見られないと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月2日 | 避難解除準備区域と居住制限区域において、個人被ばく線量を解析すると1 ミリシーベルト/年を超える線量に相当するケースもあるが、年間1 ミリシーベルト以内に収めるというのは平時の放射線防護の基準であり、これを超えたら健康影響が見られるというものではないと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月3日 | 原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）が、福島第一原発事故の健康影響に関する報告書の改訂版を2016年に出したが、大部分が2013年報告書の主要な仮定の一つまたは複数を追認する内容であった。今後も定期的にこのような報告書が作成されることが予想されると述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月4日 | チェルノブイリ原発事故の影響を受けたことによる甲状腺がんの発症と福島との甲状腺がんの発症とは状況が大きく異なり、今後も因果関係について科学的に検討する事が重要であると述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月6日 | 自家製野菜に含まれる放射性セシウム濃度が気になる場合は各市町村で簡易分析を行う体制が整っている。だが、現在野菜から検出される頻度は極めて低いと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月7日 | 山菜の中には比較的高頻度に放射性セシウムが検出されるが、種類によってその頻度は異なる。しかし、基準値を超えた山菜を数回食べたとしても基準値の設定が厳しくなっているため、健康影響があるとは考えにくいと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月8日 | 食品中の放射性セシウムの基準値は1キログラムあたり100ベクレルと定められているが、これを一年間毎日食べたとしてもレントゲン写真1回の被ばく線量の半分以下であり、健康影響は見られないと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月9日 | 福島県における甲状腺がん、またはその疑いと診断されたその多くは、精度の高い検査を行うことで放射線と関係ない、以前から一定割合ある「潜在がん」を見つけている可能性が高いと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 長崎大学の富岡町における復興推進拠点 | 長崎新聞 | 2017年 | 富岡町は一部地域を除き4月1日に避難指示解除となった。しかし戻りたいと |

| | | | | |
|---------------------|-------------------------|------|----------------|--|
| | 設置 | | 3月9日 | 考えている町民は全体の16%。長崎大学は役場に復興推進拠点を置き、住民の健康相談や放射線量測定といった活動の頻度を高め、帰郷する人を増やしていきたい。 |
| 高村 昇・教授 | 「放射線・放射性物質 Q&A」の第4巻発行 | 福島民報 | 2017年 3月10日 | 福島民報で連載した Q&A の中から特に県民の関心が高い項目を中心に一部加筆している。県放射線健康リスク管理アドバイザーの高村昇教授が回答者を務め、冊子は県を通して全市町村に配布し活用される。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月10日 | 福島県県民健康調査での甲状腺検査でこれまで100人以上が甲状腺がん、またはがんの疑いと診断されたが、事故による放射線被ばくとの因果関係は年齢的に考えにくいと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月11日 | 福島県県民健康調査で見つかった甲状腺がんは、地域によつての発症頻度は全域でほぼ同じであり、福島第一原発の近くにいたから甲状腺がんが多いという事はなかったと述べた。 |
| 高村 昇・教授 | 放射線・放射性物質 Q&A | 福島民報 | 2017年 3月12日 | 福島県県民健康調査は、対象となっている方が県外に行っても、全国で甲状腺検査を受けられるようになっている。 |
| 高村 昇・教授 折田真紀子・助教 | 川内村での拠点報告会 | 福島民報 | 2017年 3月17日 | 長崎大学原研国際の主催、川内村にて復興支援や調査研究活動の報告会を行った。 |
| 高村 昇・教授 折田真紀子・助教 | 「放射線・放射性物質 Q&A」4巻発行 | 福島民報 | 2017年 3月17日 | 長崎大学は、福島民報での連載「放射線・放射性物質 Q&A」をまとめた冊子の第四巻二万五千部を県に寄贈した。 |
| 高村 昇・教授 | 東日本国際大学・いわき短期大学 長崎大学と協定 | 福島民報 | 2017年 4月27日 | いわき市の東日本国大大学といわき短期大学は、福島第一原発事故からの復興を担う人材育成を目的に連携協定を締結した。 |
| 高村 昇・教授 平良 文亨・助教 | 長崎で原発事故と食の安全シンポジウム開催 | 長崎新聞 | 2017年 5月14日 | 東京電力福島第一原発事故で食品の安全が脅かされたことをテーマに被爆地の長崎市でシンポジウムを開き、川内村で計測した結果を発表した。 |
| 高村 昇・教授 平良 文亨・助教 | 長崎で「震災に係る食料問題フォーラム」開催 | 福島民報 | 2017年 5月14日 | 被爆地の長崎市で食料問題フォーラムが開催され、原発事故に伴う風評が根強い件さん農林水産物の安全性とおいしさを消費者にどう理解してもらおうか専門家と参加者が意見を交わした。 |
| 高村 昇・教授 平良 文亨・助教 | 食の安全 長崎で日本学術会議フォーラム開催 | 福島民友 | 2017年 5月14日 | 東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で被害を受けた農林水産物の復興を議論する日本学術会議で風評対策などについて長崎大の研究者や専門家が研究発表した。 |
| 高村 昇・教授 | 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 活動25年 | 読売新聞 | 2017年 8月1日 | NASHIM 発足から25年、300人以上の海外の医療関係者を招き、被ばく医療の人材育成を行ってきた。 |
| 高村 昇・教授 | 長崎大学、国立北西医科大学と連携 | 長崎新聞 | 2017年 9月13日 | 長崎大は国立北西医科大学と連携して、国際的な被ばく医療の専門家の育成に |

| | | | | |
|---------------------|----------------------------|------|-----------------|---|
| | | | | 取り組むと発表、福島原発事故を経験した日本とチェルノブイリ原発事故で被害にあったロシア、ベラルーシの医大で相互に学生を学ばせる。 |
| 高村 昇・教授 | 食の安全・安心アカデミーシンポジウムが郡山市にて開催 | 福島民報 | 2017年 11月4日 | 福島県郡山市にて食の安全・安心アカデミーシンポジウムが開催され消費者が安全な福島県食材への理解を深め、川内村での支援活動、山菜やキノコの放射線セッションについて説明した。 |
| 高村 昇・教授 | 福井大学、敦賀で防災・日本再生シンポジウム開催 | 福井新聞 | 2017年 11月26日 | 福井大の防災・日本再生シンポジウム「日本一の原子力立地 福井県における防災危機管理」において事故に備え人材育成の重要性を述べた。 |
| 高村 昇・教授 折田真紀子・助教 | 放射線と健康への影響～福島の復興と現状～情勢講演会 | 静岡新聞 | 2017年 12月17日 | 放射線の性質を正しく理解し、正しく怖がるためのポイントについて講演した。 |

○放射線リスク制御部門 放射線災害医療学研究分野

| 氏名・職 | 活動題目 | 掲載紙誌等 | 掲載年月日 | 活動内容の概要と社会との関連 |
|---------|---------------------------------------|--------------------------|-----------------|---|
| 山下俊一・教授 | 長崎で「震災に係る食料問題フォーラム」開催 | 福島民報新聞 福島民友新聞 長崎新聞 | 2017年 5月14日 | 日本学術会議の「東日本大震災に係る食料問題フォーラム」が長崎大で行われ、山下俊一氏は「正しく放射能や放射線を理解し、社会と向き合う知恵と技術を共有する必要がある」と述べた。 |
| 山下俊一・教授 | 被ばく医療支援 世界に絆 長崎の国際協力会の活動 25年 | 読売新聞 | 2017年 8月1日 | 発足 25年を迎えた「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）」では200人以上の海外の医療関係者を招き、被ばく医療の人材育成などを行ってきた。東京電力福島第一原発事故を機に、若い世代への教育や国際協力の継承にも努める。 |
| 山下俊一・教授 | チェルノブイリと比較 被ばく線量「はるかに低い」 日本学術会議、違いを強調 | 読売新聞 | 2017年 9月5日 | 国内の科学者の代表機関「日本学術会議」は、東京電力福島第一原発事故による子供の放射線被曝の影響を評価する「報告」を公表した。報告は、被曝線量がチェルノブイリ事故よりはるかに低いことや、胎児には影響がないことを強調。 |
| 山下俊一・教授 | 長崎大、ロシアの医大と連携して被ばく医療専門家を育成 | 朝日新聞 長崎新聞 読売新聞 | 2017年 9月13日 | 長崎大は、ロシア国立メチニコフ北西医科大などと連携して、国際的な被ばく医療の専門家の育成に取り組むと発表。山下俊一理事は会見で「被ばく医療の専門家は世界的に不足している。放射線災害が起きた際にしっかりリスクを評価できる人材をいち早くつくりたい」と語った。 |
| 山下俊一・教授 | 学長特別補佐に山下氏 長崎大が新体制人事 | 長崎新聞 | 2017年 9月29日 | 10月1日付の新体制人事として、学長特別補佐（福島復興・原子力災害担当）に山下俊一理事が新たに就任する。 |
| 山下俊一・教授 | 17年度に西日本文化賞受賞者「放射線災害に向き合う」 | 西日本新聞 | 2017年 10月30日 | 長崎大学長特別補佐 山下俊一さん「放射線災害は長期戦。医療の枠組みを超えて復興を応援していきたい」 |

| | | | | |
|----------|----------------------------|--------------|-----------------|--|
| 山下俊一・教授 | 西日本文化賞贈呈 | 西日本新聞 | 2017年 11月4日 | 第76回西日本文化賞 学術文化部門の受賞者である長崎大学学長特別補佐・山下俊一さんは、放射線被ばくによる甲状腺がんを研究し、放射線災害医療学を確立、発展させた。 |
| 光武範吏・准教授 | BS1スペシャル「原発事故7年目 甲状腺検査はいま」 | NHK ドキュメンタリー | 2017年 11月26日 | 福島第一原発事故後、相次いで見つかる子どもの甲状腺がん。専門家は、チェルノブイリとの比較などから「放射線影響は考えにくい」と報告。「過剰診断」の可能性が指摘されている。 |

○ゲノム機能解析部門 人類遺伝学研究分野

| 氏名・職 | 活動題目 | 掲載紙誌等 | 掲載年月日 | 活動内容の概要と社会との関連 |
|----------|------------------------------|------------|-----------------|---|
| 吉浦孝一郎・教授 | 被爆2世の <i>de novo</i> 一塩基変異解析 | NHK 長崎ニュース | 2017年 12月26日 | 被爆2世の <i>de novo</i> 一塩基変異解析を数えることで、被爆の影響が測定手着るかも知れないことを論文発表し、その内容が取り上げられた。 |

○原爆・ヒバクシャ医療部門 血液内科学研究分野

| 氏名・職 | 活動題目 | 掲載紙誌等 | 掲載年月日 | 活動内容の概要と社会との関連 |
|----------|-------------------------------|-------------------------|----------------------------------|---|
| 宮崎泰司・教授 | 災害・被ばく医療科学共同専攻の特徴 | 長崎大学広報誌「チャーホー」Choho 特別版 | 2017年3月 | 長崎大学・福島県立医科大学共同大学院「災害・被ばく医療科学共同専攻」設置の狙いと、カリキュラム、期待される修了者像についての特集号において、解説を行った。 |
| 宮崎泰司・教授 | 長崎被爆者カルテ電子化（日赤原爆病院半世紀・766万人分） | 毎日新聞 | 2017年 6月28日 | 厚生労働省が今年度、被爆者医療の中核を担ってきた日赤長崎原爆病院が半世紀にわたって保管してきた患者延べ約1527万人分の紙カルテを電子化し、データベースを構築する事業に乗り出す。ほぼ半数が被爆者のカルテで被爆者の診療記録としては国内の医療機関最大級の規模。原爆後障害医療研究所としての見解を述べた。 |
| 宮崎泰司・教授 | 原爆後障害医療研究所長就任の御挨拶 | 長崎医学同窓会 朋百 Vol.141 | 2017年6月 | 2017年4月1日付で原爆後障害医療研究所長就任にあたっての抱負。 |
| 宮崎泰司・教授 | 長崎大学原爆慰霊祭 | 読売新聞 長崎大学 HP | 2017年 8月10日 2017年 8月21日 | 医学部で行われた慰霊祭において当時の医科大学生や職員を追悼するとともに、チェルノブイリ、福島原発事故に関する医療支援、現地調査の実績報告ならびに犠牲者のために何ができるか今後も努力し続けることを誓った。 |
| 波多智子・准教授 | 研究会報告 難病シリーズ⑤ 血液疾患について | 長崎保険医新聞 | 2017年 4月10日 | 長崎県内の医療従事者向け講演会において平成27年の改訂により「自己免疫性溶血性貧血（AIHA）」「発作性夜間へモグロビン尿症（PNH）」「血栓性血小板減少性紫斑病（TTP）」「王天性赤芽球癆（PRCA）」が追加され現在11の血液疾患が難病指定されているが、そのうち成人にみられる5疾患について疾患 |

| | | | | |
|---------|---|--|---|--|
| | | | | 概念、診断、治療を中心に解説を行った。 |
| 糸永英弘・助教 | 第 34 回角尾学術賞受賞 「骨髄性腫瘍におけるゲノム・エピゲノム異常と臨床的効果の関連性」 | 長崎新聞 西日本新聞 長崎大学 HP 原爆後障害医療研究所 HP 長崎医学同窓会 朋百 Vol.141 | 2017 年 6 月 2 日 2017 年 6 月 8 日 2017 年 6 月 8 日 2017 年 6 月 12 日 2017 年 6 月 | 長崎大学において優れた業績を挙げた若手研究者に贈る角尾学術賞を受賞した。白血病の治療効果を上げるための遺伝子的な原因の解明に取り組んだことが評価された。 |

○原爆・ヒバクシャ医療部門 腫瘍・診断病理学研究分野

| 氏名・職 | 活動題目 | 掲載紙誌等 | 掲載年月日 | 活動内容の概要と社会との関連 |
|---------|--|-----------|--------------------|--|
| 七條和子・助教 | 原爆死～ヒロシマ 72 年目の真実～ | NHK スペシャル | 2017 年 8 月 6 日 | 最新のビッグデータ解析技術を駆使し、特定の被爆地や、死没日、死因に極端な死者数の偏りがある“原爆死ホットスポット”が存在していたことがわかった。なぜ“ホットスポット”は生まれたのか。そして人々はそこでどのようにして亡くなっていったのか―。原爆投下から 72 年、知られざる被爆の真実に迫る。 |
| 中島正洋・教授 | 被爆臓器試料デジタル化 | 読売新聞 | 2017 年 8 月 18 日 | アメリカから返還された被爆者試料のひとつであるガラス標本が長い年月の間劣化し始めている為、昨年度より高解像度のパーチャルスキャナーを導入し組織片のデジタル化を始めた。貴重な試料の半永久的な保存が可能となり、幅広く活用することで被爆医療の発展へつなげていく。 |
| 中島正洋・教授 | 父の献体は何のため訴えつづけた女性が 48 年ぶりに見た父の姿 被爆者調査の目的は？ | 中京テレビ | 2017 年 9 月 22 日 | ABCC に献体した父親の臓器と検体を決めた被爆者の再会の取材を通じて、家族の願いでもある貴重な被爆試料を用いた被爆者研究を進めていく。 |
| 中島正洋・教授 | ビンの中のお父さん | 中京テレビ | 2017 年 9 月 23 日 | 上記内容の続き。 |
| 中島正洋・教授 | 被爆者の甲状腺がん調査 | 読売新聞 | 2017 年 11 月 5 日 | 平成 29 年 10 月 20 日に開催された第 67 回 知の拠点セミナーでの講演『放射線と甲状腺がん：ヒバクシャ研究からのメッセージ』の内容について掲載された。被爆地長崎にある研究機関として、長年にわたるヒバクシャ研究から判明している放射線の甲状腺がんへの影響を述べ、現時点での問題点を整理しそれらを解決し将来に役立てるための研究の方向性を考えていく。 |